

## 未来の予言と家屋の妖怪について

山 田 徹 也

### 序

ロシアでは森や川、家屋等に様々な妖怪が棲むと信じられ、現在でもその存在を信じる者が少なくない。例えば母屋 дом にはドモヴォイ домовой と呼ばれる家屋の妖怪が棲むとされる。彼はまた家畜小屋にもしばしばその姿を現し、農家において人間が寝起きをする母屋と生産手段として重要な家畜小屋の両方を統べる妖怪であり、家屋の妖怪の中で最も代表的な存在である。ドモヴォイ以外にはロシア式蒸風呂小屋 баня に棲むとされるバンニク банник と呼ばれる妖怪がいる。バンニクは蒸風呂小屋を統べるとされ、彼の許しなく入浴するなら彼に殺されてしまうと考えられていた。その他には家畜小屋 двор の妖怪でドモヴォイとしばしば同一視されるドヴォロヴォイ дворовой、また資料こそ少ないが、穀物乾燥小屋 овин に棲むとされるオヴィンニク овинник といった妖怪達の存在もまた広くロシアにおいて信じられてきた。このように家屋の妖怪は建物毎に存在し、その建物を司る存在である。そのために彼らは、彼らが棲むとされる建物の主 <sup>おし</sup> хозяин と呼ばれることもある<sup>(1)</sup>。

ドモヴォイを除く家屋の妖怪達は基本的に人間に対してあまり好意的であるとはされず、むしろ彼らの登場する怪異譚等では人間に危害を及ぼす存在として考えられている。しかしその一方で家屋の妖怪達は人間の運命を知っており、正しい手順を踏むならば彼らから自分の未来を教えてもらうことも可能であるという民間信仰がある。

未来の予言をするという超自然的存在は、家屋の妖怪だけではない。森の妖怪レーシイ、水の妖怪ルサルカ等の他の妖怪や悪魔等、超自然的存在は基本的に人間の運命を知っている存在であり、彼らが自ら予言をしたり、占いなどの正しい方法さえ承知しているならば未来について教えてもらえと考えられた。その際の妖怪や悪魔の教え方も、口頭で予言する、映像を鏡等に映し出す等と様々である。もちろん家屋の妖怪が人間に未来を教えるとされる際も同様の方法がとられることもある。ただし、家屋の妖怪信仰にのみ見られる未来を知ることのできる方法として、妖怪の体毛が毛深いかそれとも毛が生えていないかで吉凶を知ることができるという民間信仰が存在する。

妖怪や悪魔による予言についてはヴラーソヴァ M.H. による論文「予言についてのモチーフ」<sup>(2)</sup>、

あるいは妖怪や悪魔に対して行われた占い全般についてはリャン V.F.『真夜中の風呂小屋』<sup>5)</sup>に詳しい。しかし今まで毛のモチーフと家屋の妖怪による未来の予言の関係においては論じられてはこなかった。

本論ではキリスト教受容以前に存在していたロシアの異教信仰にまで遡り、歴史的な観点から毛に対する民間信仰と未来を予言する存在としての家屋の妖怪の関係について論じる。

## 1. 運命の告知者としての家屋の妖怪

### 1-1 母屋の妖怪ドモヴォイ

既に述べたように家屋の妖怪は基本的に人間に対し敵対的であると考えられている。しかし、ドモヴォイだけは例外的に人間に対し好意的であると考えられ、母屋に住む人間と家畜の護り手とされている<sup>6)</sup>。

ドモヴォイによる予言は様々な形で人間に対して行われる。例えば「家畜の上でドモヴォイがずっと泣いていたんだ」<sup>7)</sup>というように泣き声やうめき声、ぜいぜい喘ぐような音が聞こえた場合、それは火事等の何らかの不幸な出来事の前触れだという<sup>8)</sup>。以下のように床等から原因不明の音が聞こえるというポルターガイスト現象も彼の予言の手段のひとつであると考えられている。「突然、床板がかたかたといいだしたもんだからとてもびっくりした。(中略—引用者) 大抵こういうことは不幸なことが起きるって意味だ」<sup>9)</sup>また、彼自身が突然姿を現して、戦争の終了や夫の死を告げていったという以下のような怪異譚も記録されている<sup>10)</sup>。

ある女の人に聞いた話だけだね。その人が言うには「私はベチカに寄りかかっていたんだけど、そこに床からほんの少し、このくらいの背の低い男の人がやってきて『3日後に戦争は終わる』って言ったのよ。そしたらほんとに戦争が3日後に終わったんだ。あれはドモヴォイだったんだろうねぇ。」<sup>11)</sup>

これら以外にも広くロシアにおいてドモヴォイから未来のことを知ることができると考えられたものに金縛り現象がある。ロシアの民間信仰では、金縛りは日本と同様に何らかの超自然的存在によって引き起こされた現象であり、人間の寝る場所である母屋の妖怪であるドモヴォイもまた寝ている人間に対して金縛りをかけるとされてきた。またその際、以下の怪異譚の語り手が実際に聞いたと証言している通り、金縛りの際には人間側が「吉か凶か?」と尋ねると、その質問に対して吉か凶かを口頭で答えるとされている<sup>12)</sup>。

これは戦争<sup>13)</sup>が終わった後のことだが、私にあったことだ。私が酒盛りから帰ってきたあと寝ていると、私の胸に誰かがのりかかってくる、目を開けることもできなかった。私が凶

か、吉かと聞くと、彼は一言『凶だ』と言い、すると私も楽になった。2日後、大工仕事をしに私が出かけると、私たちの方へ走ってくる人たちがいて、3軒の小屋が倒れてしまったと言う。つまりこれが凶になるってことだった。

彼には吉か凶かと訊かなくてはいけない。<sup>(12)</sup>

また以下に見られるように、金縛りをかけてくるドモヴォイ自身の体毛の有無によって吉凶が判断されることもある。

私はドモヴォイに金縛りにかけられたことがあるんだ。彼はこんな風に私にのしかかってきたので、息も出来ないし、指も動かせなかった。もし彼が人間みたいにすべすべで毛が生えてなかったら、不幸が起きるということで、もし猫みたいに毛むくじゃらならば幸せになるってことなんだ。<sup>(13)</sup>

ただしドモヴォイ信仰において彼の毛の有無が吉凶を示唆するというのは比較的稀なことであり、むしろ金縛りに際し、毛深いものが接触してきたことをドモヴォイの出現の証として考える場合や単なる外見的特徴として特に気にはされない場合が多い<sup>(14)</sup>。

また金縛りに対する解釈は多様であり、上記の解釈以外にも金縛りにかけられた人間が未婚の女性ならばドモヴォイがその女性をどこかに嫁がせようとしている、あるいはドモヴォイがある人間を自分の棲む家屋に存在させたくなくて追い出そうとしている、家の中での規律を重んじるドモヴォイがその違反者を罰するために金縛りにかけた等と考えられた<sup>(15)</sup>。また通常、そうした際、彼の外見が毛むくじゃらかどうかという要素は重要視されない。

こうした金縛りの怪異譚では、ドモヴォイは突然現れ、それを人間側が受動的に解釈する。その一方で、人間が自分の運命を占うためにドモヴォイを呼び出そうとすることもある。

私の父親が話してくれたことなんだけどね、清潔な梳き櫛を持ってきて、桶に水を入れる。ただその水を入れた桶も清潔なものでなくちゃいけない。そしてその桶に櫛を投げ入れる。すると3日後、ドモヴォイの髪の毛がつくんだって。それで私たちも3日経ってから桶を見みると、実際に灰色と白の髪の毛がついていたんだよ。(中略一編者) あとその髪の毛を手の上でこすりつけると、明かりが消えて暗くなる。そしてドモヴォイが、出てくるんだそう。

(中略一引用者) 次の日、家に帰って、真夜中にこすりつけると、髪の毛の白い老人が座っているのが見えたんだ。彼は裸で、あの灰色がかった白い髪の毛を体にまとうようにしていただけた。ひげを長く伸ばし、とても年を取った老人だった。私は近くにいきこうとしたが、

そこですぐに座り込んでしまった。あまりに驚いて、まったく、ひと言もしゃべれなかった。

彼はちょっと座っていたが、そらっ！という、彼はもういなくなっていた。(中略—引用者)

朝になってから、父親にそのことを話すと、「彼を見たっていうのは、いいことだ。幸せに暮らしていけるだろう」と言われたよ。<sup>21</sup>

この怪異譚ではドモヴォイは全身を白い髪で包みこんでいたと語られ、その呼び出しに応じてドモヴォイが姿を見せたということ自体が良い兆しであると考えられている。ただし上記の例のように占いにおいて未来を教えてもらう対象としてドモヴォイを選ぶということは稀である。通常、ドモヴォイは人間によって呼び出される妖怪ではなく、既に例としてあげたように突然人間の前に現れて未来のことを告げたり、前触れも無く金縛りにかけ、人間の質問に答えたりする存在であり、基本的には呼び出される存在ではない。

民間信仰においてドモヴォイは、人間の未来に関する質問に直接答えるだけではなく、泣き声をあげたり、金縛りにかけることによって未来を告げに人間のもとに出現する等とされる。またその際には、ドモヴォイの出現自体が何らかの兆しであったり、吉か凶かと訊く必要があるとされることが多い。ただし稀ではあるが、現れたドモヴォイの毛の有無が何らかの兆しであるとされることもあり、それは常に金縛り現象と結びつく。

## 1-2 風呂小屋の妖怪バンニク

蒸風呂小屋の妖怪バンニクは、家屋の妖怪の中でも人間に対して最も敵対的な性格の持ち主とされる。バンニクの人間に加える危害は、主に蒸気浴と結びついている。例えばバンニクは、人間が蒸風呂小屋で2回蒸気浴を行うと、3回目は自分の番だと考え、その禁忌を破り、邪魔をする人間を殺すと考えられていた。また真夜中に蒸風呂小屋にやってきて蒸気浴をしようとする人間を殺してしまうとも畏れられた<sup>22</sup>。

しかし真夜中に蒸風呂小屋に行くことが常に禁忌とされていたわけではない。彼は、真夜中に彼の元にやってくる人間に対してその未来を教えるとも考えられた。ただしそれは特に人間に敵対的とされる妖怪、悪魔が活発化されるというスヴァートキ *святки* の期間に限定されている。

スヴァートキとは12月25日のクリスマスから1月6日の洗礼祭(主顕節)までの12日間であり<sup>23</sup>、年末から年始にかけての古い年と新年の境界に位置する祭日が集まっている祝祭期間である。またスヴァートキは、クリスマスと洗礼祭というキリスト教の祭日によって区切られているが、キリスト教以前に存在していた異教的な要素を現代にまで色濃く残している。例えばスヴァートキに人々が悪魔や死人、山羊等の動物の仮装をして練り歩いたり、結婚前の男女が集まって異教的な様々な遊戯をして愉しむ風景はロシアにおいて広く観察されていた<sup>24</sup>。また教会はこうした行為を異教崇拜であるとして「不浄な、穢れた *нечистый*」行為であると非難していた<sup>25</sup>。

スヴァートキはまた妖怪、悪魔等の存在がその活動を活発化させる期間であるとも考えられ、彼らに対して占いが行われた。スヴァートキに行われる占いの多くは未婚の女性による自分の未来の結婚相手、あるいは結婚生活について行われたものである。この占いはバンニクに対しても行われたが、このスヴァートキの占いにおいては必ず先のドモヴォイの怪異譚においても見られた毛のモチーフが登場する。

北ロシアでは、未婚の女性が真夜中に蒸風呂小屋へ行き、スカートの裾を頭までめくる。そしてお尻を出し、その姿のまま後ろ向きに蒸風呂小屋に入る。またそのとき蒸風呂小屋に入りながら『夫が金持ちなら、（私のお尻を一引用者）毛むくじらの手で叩いて』と言う。もし体に（バンニクの一引用者）ふさふさした毛の生えた手が触ってくるようであれば金持ちの男と、またもし毛のないすべすべの硬い手で触ってきたら、貧乏で凶暴な男と結婚するという意味になる。また手が柔らかければ夫は優しい性格をしているという意味である。<sup>(21)</sup>

上記の方法以外にも「煙突に手を入れ、もし毛の無い手が、占いをしている女の子の手をつかんだらば、未来の花婿は貧しいという意味で、もし手が毛深ければ、それは花婿が金持ちであるという意味である」<sup>(22)</sup>というように蒸風呂小屋の煙突に手を入れるという方法、あるいは蒸風呂小屋の通気口に手を入れるという占い方法もあった。占いの結果としては未来の夫の性格について占われることもあるが、結婚相手が金持ちになるかどうか、あるいは結婚後、裕福な暮らしをしていけるかどうかということが占いの対象とされることも多い<sup>(23)</sup>。

### 1-3 穀物乾燥小屋の妖怪オヴィンニク

穀物乾燥小屋の妖怪オヴィンニクは、バンニクと同様に人間に対して敵対的な存在であるとされ、彼を敬わなければ穀物乾燥小屋が火事になると考えられた。しかし、一方で彼に礼を尽くせば、収穫物を護ってくれる存在としても考えられた<sup>(24)</sup>。

またオヴィンニクも未来を知っていると考えられ、スヴァートキにおける占いの対象とされた。「真夜中に手を穀物乾燥小屋の窓に入れる。もし誰も触ってこなければ結婚することはできない。手に毛が生えてなければ貧乏人と結婚する。ふさふさとした毛が生えていれば金持ちと結婚する」<sup>(25)</sup>というように彼に対してもまたスヴァートキにおいて結婚の占いが行われた。以上のようにオヴィンニクに対してもバンニクと同様、毛の有無によって結婚相手が金持ちかどうかに関しても占われた。ただしフォークロア資料の採集が盛んに行われるようになる19-20世紀では、このオヴィンニクに関する民間信仰がほとんど農村の伝統から消えてしまっており、例に挙げたような占いにおいて部分的に残っているに過ぎない点是指摘しておく必要があるだろう。

#### 1-4 家畜小屋の妖怪ドヴォロヴォイ

その他の主な家屋の妖怪としては、家畜小屋の妖怪ドヴォロヴォイがいる。彼は家畜小屋の主であり、ドモヴォイと同様、家畜の護り手として考えられた。また、ドヴォロヴォイの棲むとされる家畜小屋は、母屋に付随して建てられたので、ドヴォロヴォイの司る領域とドモヴォイの司る領域の境界線があいまいになり、ドヴォロヴォイとドモヴォイは同一の存在であるとも考えられた<sup>(26)</sup>。

彼がドモヴォイと同様に毛のモチーフと結びついて、未来を予言するとされることは、論者の知る限りではない。ただしドモヴォイと同一視された結果、ドヴォロヴォイが人間に対して金縛りをかけ、予言をするとされることはあった。

私はベチカの上に寝てたんだが、どうやら眠ってしまっていたらしい。突然何かが私に犬のようにのしかかってきて、息もできないし、苦しかった。(中略—引用者)私は『私に犬みたいにのしかかってきたのだけれど、あれはいったい何だろうねぇ』と訊いた。するとマリアばあさんは「そいつはドヴォロヴォイだ。あんた何で『凶か吉か?』って訊かなかったんだね。悪いことの前触れなら、彼が『凶だ!』って言っただろうに」<sup>(27)</sup>

またドヴォロヴォイやドモヴォイは家畜の主であると考えられたため、新しく連れてこられた家畜が彼らの気に入らないものだ、その家畜は彼にいじめられ、病気になったり、あるいは死んだりすると考えられた。彼が家畜を気に入るかどうかの基準としては、その家畜の毛色が問題となる。毛色がドモヴォイやドヴォロヴォイに気に入らない色の場合、家畜は、ドモヴォイやドヴォロヴォイにいじめられると考えられた<sup>(28)</sup>。

#### 1-5

以上のように家屋の妖怪の中でもドモヴォイやバンニク、オヴィンニクといった家屋の妖怪は未来を告げるモノとして現れることがある。またその際、彼らの毛の有無によって吉凶を解釈することができるという民間信仰が存在する。ただしドモヴォイの民間信仰では必ずしも金縛りと毛のモチーフが、常に結びつくわけではなく、結びつくことはむしろ少ない。一方、その結びつきが強く現れるのがバンニクとオヴィンニクの民間信仰においてである。バンニク、オヴィンニクが未来を予言するというスヴァートキの占いでは常に毛のモチーフがあらわれる。

### 2. 家屋の妖怪と異教信仰

ドモヴォイは人間に対して様々な形式で人間に未来を予言するが、毛のモチーフは金縛り現象と共に語られる。一方、バンニクやオヴィンニクといった家屋の妖怪に関しては、毛のモチーフ

はスヴァートキの占いと共に語られる。これらに共通する点は、ドモヴォイやパンニク、オヴィンニクといった家屋の妖怪が触れてきた際、彼らの毛の有無によって吉凶を判断することができるという民間信仰である。その際、毛のある場合が吉兆であり、毛の無い場合が凶兆となる。

他のキリスト教国に見られるように、妖怪、悪魔という存在は元来、キリスト教以前に信仰されていた神々や精霊がキリスト教受容によって貶められ、零落した存在である。ロシアにおいてもそれは同様であり、そのため妖怪の起源については彼らが元は天使であったものが地上に落ちて零落したものだという伝説も残されている。

創世の時、天使の中には傲りたかぶり、創造主に刃向かった者達がいた。神はそうした自分の言うことをきかない悪い天使を全て大地へと投げ落とし、そうして墜ちてきたものは妖怪や悪魔となった。このとき家に墜ちた天使が他の者よりも善良だったのか、人間の近くに棲むようになってから善良になったのかは不明である。しかし家に墜ちてきた天使は家に棲む妖怪となり、その力は衰えても、彼だけは、邪悪なモノとされるヴォジャノイやレーシイ、あるいは悪魔のようにはならなかった。あたかも生まれ変わったように人に好意を持ち、人間のように陽気で騒々しいものになった<sup>(29)</sup>

そして上述の家屋の妖怪信仰において毛のモチーフが吉凶の兆しとして重要視される要因もまた、ロシアの異教信仰にその起源を求めることができる。『スラヴの古代』によれば髪や毛の持つ豊かさのイメージは異教の神であるヴォロス神にまで遡ることができるとされている。ロシアの異教に関しては非常に資料も少なく、このヴォロス神についても断片的に残されているだけである。しかし、10世紀のビザンツとの条約においては「家畜の神 *скотий бог* であるヴォロス」に対して誓われており、少なくとも家畜の神であったと考えられている。また、その条約の内容が通商条約的側面や財産に関する取り決めを含んでいたこと、そして現代ロシア語では家畜を意味する *скот* が古語では「財産、貨幣」を意味していたこと、そして家畜 *скот* と同語根の *скотол юбие* は「私欲、金銭欲」、*скотница* は「金銭、富」という意味で現代でも用いられるので富を司る神でもあったのではないかと推測されている<sup>(30)</sup>。

またシャパロヴァは、ヴォロスという名称そのものが「毛の生えた、毛深い、毛むくじゃら」という意味の *волосатый* と同語根であり、ヴォロス自身も獣の姿をしていたと推論している。また彼女は、「異教の祭司」という意味の *волхв* という語もまた *волосатый* と同語根であるということも挙げている<sup>(31)</sup>。ヴォロスの語源に関しては諸説あり、それが狼 *волк* に由来している説も存在する。ただしどちらにしてもこうした語彙から毛に対する概念が異教において非常に重要な位置を占めていたことが窺えよう。

家屋の妖怪の体毛の有無から自分の運命を知ることができるという民間信仰においては毛のあ

る場合が吉兆であり、毛の無い場合が凶兆である。こうした毛むくじゃらであることが富を意味するというのはキリスト教以前の異教、より具体的に言えばヴォロス信仰にその起源を求めることができる。異教信仰において毛は、富を意味するものであると考えられていた。それゆえにこそ、既に述べたような蒸風呂小屋の妖怪バンニクや穀物乾燥小屋の妖怪オヴィンニクに対するスヴァートキの占いにおいては毛の有無によって結婚相手が金持ちかどうか占われたのである。

### 3. 家屋の機能の分化と家屋の妖怪の分裂

ドモヴォイやドヴォロヴォイ、オヴィンニク、バンニクといった家屋の妖怪達は、基本的には棲みかの異なる別個の存在であるとして考えられている。彼らにも性格に違いがあり、ドモヴォイが最も人間に対して友好的であり、ドヴォロヴォイやオヴィンニクといった作業小屋の妖怪達がそれに続く。そして既述のように、バンニクが人間に対して最も敵対的であるとされる。こうした彼らの持つ性格の差異は、彼らが基本的には別個の存在として扱われているという証左ともなろう<sup>(92)</sup>。これは彼らの名称からも明らかである。例えばバンニクやドモヴォイといった家屋の妖怪の名称は、直訳するならば「蒸風呂小屋に棲むモノ」や「母屋に棲むモノ」という意味になる。またそれ以外の妖怪達もドヴォロヴォイは「家畜小屋に棲むモノ」、オヴィンニクが「穀物乾燥小屋に棲むモノ」という意味になる。こうした名称から家屋の建物毎に異なる妖怪が棲んでいるという考えが妖怪信仰の根底にあるということが明白である。

しかし、元々、彼らの棲むとされる建物はキリスト教受容以前、個別に存在せず、その機能は現在の母屋の機能と共に1つの建物にまとめられていた。考古学者達の調査によれば、東スラヴ人は、キリスト教受容とほぼ同時期の10世紀まで家畜と共に土小屋に住み、そこで蒸気浴も行っていた。これは住居形態が地上に建てられるようになる前の最も古い住居であったと考えられている<sup>(93)</sup>。が、その後、建築技術が発達し、風呂小屋兼住居が新しく建てられるようになると古い住居は北ロシア等では蒸風呂小屋として、あるいは蒸風呂小屋を建てない他の地域においては穀物乾燥小屋等としても用いられることにもなった。またそれらは冬の間に家畜用の越冬小屋としても機能した<sup>(94)</sup>。

現在においても妖怪信仰が残っていることから、キリスト教受容後、即座に異教信仰が無くなったわけではない。元来1つの建物において存在してきた異教信仰は、時代と共に様々な建物が建てられ、家の機能が分化すると、ドモヴォイやドヴォロヴォイ、バンニク等の個々の家屋の妖怪信仰へと分裂していった<sup>(95)</sup>。そしてそのゆえにバンニク、オヴィンニクといった妖怪達においても、本来は家畜に対するものであった毛に対する異教的概念が残った。スヴァートキにおいて結婚相手の富に関して占われ、そしてドモヴォイの金縛りにおいても毛の有無で吉凶が占われるのはそのためである。

ただし家屋の妖怪達における毛の有無による民間信仰においては相違点も見られる。例えば既



に指摘したようにドモヴォイは金縛りに際しては毛の有無によって吉凶の判断ができるという信仰が存在したが、それは稀なことであり、占いにおいては、そもそもバンニクやオヴィンニクのように呼び出される対象とされること自体が稀である。また占いと毛の民間信仰が結びつくこともない。そして更に言えば以下にロシアの民間信仰研究者クリニチナヤが指摘しているように、1年の中でも占いが盛んに行なわれたスヴァートキにおいてはドモヴォイとドヴォロヴォイ自身が名指しされて呼び出されることすらないのである。

スヴァートキの占いにおいてドモヴォイやドヴォロヴォイ等の家屋の妖怪が名指しされるということはない。しかしその代わりにこの異教の神への信仰を想起させるものが占いに用いられる。それは火（炎、火花、煙）、炭、燃えさし、煤、灰、燃えかす、火かき棒、鍋支え、フライパン挟み、フライパン等である。<sup>(36)</sup>

このようにスヴァートキの占いにおいてドモヴォイ自身が登場するということはなく、その痕跡だけが母屋の暖炉を用いた占い等に見られるとされる。例えば灰を用いた占いとしては、母屋等の床に夜、灰を撒き、そして次の日になってその灰の形がどうなっているのかで判断するという占いが挙げられる<sup>(37)</sup>。また本来ドモヴォイやドヴォロヴォイの代わりに母屋や家畜小屋における占いの対象は悪魔である<sup>(38)</sup>。

ドモヴォイやドヴォロヴォイといった妖怪の民間信仰において、こうした毛のモチーフが強く残されてきていないのは、家屋の分化による影響であろう。建築技術の向上により1つの小屋で全てを行うという古い居住スタイルは廃れ、次第に蒸風呂小屋や様々な農作業小屋と母屋が別の建物として建てられるようになっていった<sup>(39)</sup>。そしてキリスト教が民衆に浸透するに従い、母屋とそれに付随して建てられた家畜小屋には聖像が置かれる等、キリスト教信仰の中心の場へと変わっていった。そのためヴォロス信仰等に由来する超自然的存在の毛の有無から自分の未来を知ることができるという異教信仰も母屋等では弱められ、逆にドモヴォイなどは、先の妖怪由来の伝説に見られたように、キリスト教に近い存在として人間に友好的な存在となったと考えられる。それゆえにドモヴォイの民間信仰には異教信仰的側面を強く持つ毛のモチーフがさほど残らなかったのではないだろうか。

一方、蒸風呂小屋や穀物乾燥小屋はどうであったのか。キリスト教受容によりそれ以前に存在していた異教信仰がすぐさま完全に消滅したわけではない。家庭内におけるキリスト教信仰の中心の場が母屋となった代わりに、異教信仰の場としては蒸風呂小屋や穀物乾燥小屋という建物が用いられるようになった。例えば蒸風呂小屋ではキリスト教受容以後もロジャニツァという女神を信仰する場として用いられていたことが明らかにされている<sup>(40)</sup>。また穀物乾燥小屋も異教の神々を信仰する場として用いられた<sup>(41)</sup>。それゆえに異教信仰の場であった蒸風呂小屋や穀物乾燥

小屋の精であるバンニクとオヴィンニクは、ドモヴォイやドヴォロヴォイよりも敵対的な存在として考えられるようになっていった。そして比較的后代にまでバンニクやオヴィンニクに対してスヴァートキに異教的な占いが行われ、またそこでは異教由来の毛に関するモチーフも残されてきたのである。

## 結論

様々な形ではあるが毛のモチーフは、ドモヴォイやバンニク、オヴィンニクといった妖怪の信仰の中に共通して見られる。こうした毛に対する信仰は、異教に由来し、家畜の神であるヴォロス信仰にまで遡ることができる。家畜は、古代において富や財産そのものであったからであろう。そのためにドモヴォイやバンニク、オヴィンニク等の家屋の妖怪信仰においては毛の有無によって吉凶や結婚相手の富に関して知ることができると信じられてきたのである。

キリスト教受容以前ロシアの家屋は1つであり、全ての機能がそこに集約されていた。その後住居形態が発展し、元々あった家屋の機能が様々な建物に分けられるのにしたがって個々の建物に対する信仰が派生し、現在にも残っている多様な家屋の妖怪に関する信仰が形成された。1つの建物に家畜と共に暮らしていたがゆえに、本来ならば家畜とはさほど関係のない蒸風呂小屋や穀物乾燥小屋の妖怪であるバンニク、オヴィンニク信仰においても毛に対する信仰が見られるのである。また本来であれば家畜が飼われている家畜小屋が、毛の民間信仰が最も強くあらわれる中心となるべきであろう。しかし、現代においてはむしろ家畜とは関係のない蒸風呂小屋や穀物乾燥小屋が毛に対する異教信仰の場の中心となっている。それはキリスト教徒である人間の住む母屋とそれに付随して建てられる家畜小屋はキリスト教化し、異教信仰の中心の場が蒸風呂小屋等の他の建物へ移され、毛に対する異教信仰が比較的強く残ったからであろう。

以上のように家屋の妖怪信仰に見られる毛の民間信仰に対しては、家屋の発展やキリスト教受容による異教信仰の中心となる場の移動という歴史的な要素が大きく影響を与えている。家屋の妖怪にあらわれる毛のモチーフ差異はそういった歴史的な要因により生みだされてきたのである。

## 注

- (1) *Левкиевская Е.Е.* Духи локусов // *Толстой Н.И. (ред.)* Славянские древности. Т.2. М., С. 155.
- (2) *Власова М.Н.* Сюжет о пророчестве // *Русский фольклор*. Т.32. 2004. С.223-228.
- (3) *Райан В.Ф.* Баня в полночь. Исторический обзор магии и гаданий в России. М., 2006. (1999年初出)
- (4) *Власова М.Н.* Русские суеверия. СПб., 2001. С. 140.
- (5) *Черепанова О.А.* Мифологические рассказы и легенды русского Севера. СПб., 1996. № 78.
- (6) *Зиновьев В.П.*(сост.) Мифологические рассказы русского населения Восточной Сибири. Новосибирск, 1987. № 96, 97., *Колчин А.* Верования крестьян Тульской губернии. // *Этнографическое обозрение*. 1899. № 3. С.34., *Традиционный фольклор Новгородской области*. СПб., 2001. № 204等。
- (7) *Черепанова О.А.* Мифологические рассказы. № 105.; *Афанасьев А.Н.* Поэтические воззрения славян на

- природу. Т. 2. М., 1994. С. 113. (初出は1868年)
- (8) Черепанова О.А. Мифологические рассказы. № 74; Луганский К. Домовой // Иллюстрация. 1845. Т. 1. № 5. С. 77.
- (9) Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. № 108.
- (10) うめき声や泣き声がどこからともなく聞こえてきた時に、「吉か凶か」と尋ねなければいけないとする場合もある。例えば Корепанова К.Е. (сост.) Мифологические рассказы и поверия Нижегородского Поволжья. СПб., 2007. № 123-133, 135-163.
- (11) 第二次世界大戦
- (12) Черепанова О.А. Мифологические рассказы. № 88.; 他には Корепанова К.Е. Мифологические рассказы. № 57, 76, 124, 165-169; Традиционный фольклор. № 197, 201, 202等。
- (13) Черепанова О.А. Мифологические рассказы. № 93.
- (14) Корепанова К.Е. Мифологические рассказы. СПб., 2007. № 164.「手を触ってくるんだが、毛深ければ、そいつがドモヴォイさ」
- (15) Богатырев П.Г. Верования велкоруссов Шенкурского уезда: (Из летней экскурсии 1916 года) / Собрал и записал П.Г. Богатырев // Этнографическое обозрение. 1916. № 3-4. С. 56-57; Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. № 101; Карнаухова И.В. Суеверия и бывальщины // Крестьянское искусство СССР. Искусство севера. Л., 1928. С. 82-83; Колчин А. Верования крестьян. С. 34., Корепанова К.Е. Мифологические рассказы. № 60, 73-76; Традиционный фольклор. № 192, 200; Черепанова О.А. Мифологические рассказы. № 90.
- (16) Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. № 77.
- (17) Власова М.Н. Русские суеверия. С. 31-32.
- (18) ただしスヴァートキがクリスマスではなく、その2、3日前や、あるいはそれよりも前の12月6日に始められていたという地域も存在する。
- (19) 例えばスヴァートキの遊戯としては「うずら」や「旦那」と呼ばれる婚礼ごっこがある。Чичеров В. И. Зимний период русского земледельческого календаря XVI-XIX веков. М., 1957. С. 209-210.
- (20) Афанасьев А.Н. Поэтические воззрения славян на природу. Т. 3. М., 1994. С. 730. (初出は1869年), Бернштам Т.А. Молодежь в обрядовой жизни русской общины XIX - начала XX в. Л., 1988. С. 242.
- (21) Зеленин Д.К. (перевод Цивинной К.Д.). Восточнославянская этнография. М., 1991. С. 340; Забылин М. Русский народ: Его обычаи, обряды, предания, суеверия и поэзия. М., 1990. С. 27. (1880年初出); Чулков М.Д. Абевера русских суеверий, идолопоклонических жертвоприношений, свадебных простонародных обрядов, колдовства, шаманства и проч., сочинения М.Ч. М., 2008. С. 92. (1786年初出); Максимов С.В. Нечистая, неведомая и крестная сила СПб., 1994. С. 269. (1903年初出) にも同様の占いが見られる。
- (22) Богатырев П.Г. Верования велкоруссов. С. 75.
- (23) Карнаухова И.В. Сказки и предания северного края. М., 1934. № 80; Максимов С.В. Нечистая, неведомая. С. 53-54.等
- (24) Власова М.Н. Русские суеверия. С. 373-376.
- (25) Даль В. Пословицы русского народа : в 2 т. М., 1984. С. 224. (1862年初出); Максимов. Нечистая, неведомая. С. 324.
- (26) Власова М.Н. Русские суеверия. С. 133.
- (27) Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. № 308; 他に Традиционный фольклор. № 191等。
- (28) 例えば Богатырев П.Г. Верования велкоруссов. С. 56., Корепанова К.Е. Мифологические рассказы. № 96, 108; Максимов С.В. Нечистая, неведомая. С. 38; Черепанова О.А. Мифологические рассказы. № 101等。: また逆に氣に入る家畜の毛色を指示する場合もある。Богатырев П.Г. Верования велкоруссов. С.53; Карнаухова И.В. Суеверия и бывальщины. С. 82-83., Максимов С.В. Нечистая, неведомая. С. 38-39.

- (29) Максимов С.В. Нечистая, неведомая. С. 29–30.
- (30) Топоров В.Н. Боги // Толстой Н.И. (ред.) Славянские древности. Т. 1. М., С. 214–215.
- (31) Шапарова Н.С. Краткая энциклопедия славянской мифологии. М., 2001. С. 151–153.
- (32) ただしドモヴォイとドヴォロヴォイは既に述べたように同一視されることもある。
- (33) Раппопорт П.А. Древнерусское жилище. Л., 1975. С. 27–111.
- (34) Литинская В.А. (Отв. ред.) Баня и печь в русской народной традиции. М., 2004. С. 249.
- (35) この家の分化と妖怪の分裂について、バンニクとドモヴォイのみの関係については概論を拙論において発表済みである。そのため簡略した説明に留める。山田徹也「風呂小屋の精バンニク一家の精ドモヴォイとの対比において」『口承文芸研究』31巻, 106–118頁を参照。
- (36) Крипичная Н.А. Домашний дух и святочные гадания. Петрозаводск, 1993. С. 5.
- (37) Даль В. Пословицы. С. 224.
- (38) 例えば Зиновьев В.П. Мифологические рассказы. № 147–149.
- (39) Литинская В.А. Баня и печь. С. 249.
- (40) Мирюлюбов Ю. Русская мифология: Очерки и материалы. München, 1982. С. 55.
- (41) Левкиевская Е.Е., Плотникова А.А. Овин // Славянские древности. Т. 3. М., 2004. С. 493–494.